



Vigilantes and Gangsters in the Borderland of
West Kalimantan, Indonesia

by Reed L. Wadley and Michael Eilenberg

ARTICLES
Kyoto Review of Southeast Asia
developed for the web by Squeakystudios Design First production, Copyright 2006



インドネシア、カリマンタン西部の国境地域における自警団とギャング

リード・L・ワドレー、マイケル・アイレンベルグ

[リード・L・ワドレーは、ミズーリ大学コロンビア校（アメリカ合衆国）人類学部で、マイケル・アイレンベルグは、オーフス大学（デンマーク、モエスゴール）人類学・民族誌学部でそれぞれ教鞭をとっている。]

風見鶏のように自らの利に応じて国境を行き来するような人々は、どちらの国家からも貴重な市民としては、まずみなされない。¹

国境地域というものは長く暴力行為の行なわれる場であった。こういった行為は、どちら側の国家も辺縁地域を統治する能力に欠けたり、あるいは無関心であったりすることによって引き起こされた。また、「手に負えない」国境域の人々に対し、折に触れて行なわれる干渉もその原因の一つである（Paredes 1958: Wadley 2004）。無法状態の国境地域、あるいは国家の定める法律の効力が曖昧な空間は、密輸や税金逃れなど、両側の国家から違法と見なされる諸活動の温床となる（Tagliacozzo 2001）。また、こういった違法行為に立脚し、保護と暴力によって維持される地方的なリーダーシップは、国境地域において発展しやすい（McCoy 1999）。こういった状況下において国境地域の人々は、国家の干渉に対しかなり高い度合いでの自治を享受しているため、もともとはっきりしない彼らと国家との関係はさらに曖昧なものになる（Martinez 1994a）。本ペーパーにおいて、筆者は、イバン族の居住する西ボルネオの国境地帯（図1）の無法状態と自治について、自警団活動、ギャング活動²に特に焦点を定め検討し、国境地帯の曖昧さと分離性がこの二つの活動にいかにか拍車をかけているかを考察したい。³ 自警団活動、ギャング活動がインドネシア全土に見られる一般的な現象であることは広く知られているが、我々が示しているのは、国境という地理的位置づけによって、これらの活動は独自の形を持つものになっている、ということである。

[図1]

¹ *Sarawak Gazette* (1 October 1895)におけるブルグドルファー知事補佐の報告より引用。 2 December 1914, Verbaal 20 Augustus 1915 No. 41, Politieke Verslagen en Berichten uit de Buitengewesten van Nederlands-Indië (1898-1940), Ministerie van Koloniën, Algemeen Rijksarchief, The Hague, Netherlands [以下 ARA と略称]。

² 「自警団活動」の語は、法を自分の手の内に置くこと、あるいは置こうと標榜することを指し（つまり、法、裁判の執行についての規定のルートを逃れること）を指す。一方、「ギャング活動」の語は単純に、組織的な犯罪行為を指している（American Heritage Dictionary 2000）。

³ ワドレーによるフィールドおよび史料調査（1998-2001）は、オランダ、ライデンのアジア国際研究センターの助成金を受けている。また、インドネシア国際森林調査センターをスポンサーとしている。アイレンベルグのフィールドリサーチ（2002-03）は、デンマーク政府助成金を受けて行なわれ、ポンティアナックのタンジュンプラ大学、国家教育学部、社会科学第2プログラムをスポンサーとしている。また、2005年における追加調査は、[the WWF Verdensnaturfonden/Aase og Ejnar Danielsen Fond](#)より助成を受けている。

ボルネオにおける英蘭の植民地主義はカリマンタンのイバン族をサラワクにおける主居住域から分離した。このことは、19世紀半ばに始まる国境域にまたがった首狩りの制圧と、植民地化における市民権の明確化に対する努力に端を発している。イバン族の居住する国境域は、植民地間に起こる問題の争点にしばしばなった。そしてイバン族は、英蘭それぞれの植民地支配がもたらす諸条件の違いをフルに活用した。例えば、国境地域を税金逃れの隠れ蓑や植民地権力への抵抗の場とした (Wadley 2004)。20世紀半ばにおけるインドネシアの独立やマレー連邦の成立は、ただ分化を深めたただけであった。とりわけ、1960年代初頭のコンフロンテーション期に国境域で行なわれた嚴重な軍事化、またそれに続いて1970年代に向けて起こった共産主義者の暴動の制圧期にはそういった傾向が強くみられた。しかし、このことによって国境域における人口や分割された州が国境の向かい側と切り離されてしまったわけではない。その反対に、国境を越えての人の行き来は、何十年来に引き続いて大に行なわれていた。1980-90年代にかけての国境域における道路網の建設によって、合法であれ違法であれ、国境を行き来する人とももの流れは増加した (Wadley 1998)。それに加え、アジア経済危機とスハルト政権の崩壊に引き続いた地域的な自治の開花は、この流れに拍車を掛けた (Fariastuti 2002; Riwano 2002; Siburian 2002)。

しかしながら、インドネシアの中心地からの遠さに加えて、この時期に生まれたインドネシア、マレーシア間の経済格差によって、カリマンタンのイバン族は経済的にマレーシアを志向するようになっていた。この傾向は、彼らが文化的、歴史的にサラワクにルーツを持っていることによってもいっそう強まっていた。1997年におけるアジア経済危機と政治の劇的な変化は、インドネシアにおいては国境域の非軍事化も含め急速に展開し、イバン族のサラワク志向の傾向をさらに深める結果をもたらした。国境域のイバン族はより豊かで政治的に安定した隣人に接しているため、その利害関係の一部は国境を越える性格を持っている。彼らが関係性を広げている地域一体は、一時的な雇用の場、あるいはいずれは移民することになる頻りに訪れる場なのである。インドネシアの中央政府の影響力の低下の副産物として、現在進行中の「違法」伐木搬出ブームは、渾然とした地域経済の取ろうとしている戦略を象徴している。が、このブームにおいて重要な要素とは、製材所を地域に持ち、マレーシア人のイバン族の労働者を抱え伐木搬出作業を行なっているマレーシアの華人系材木企業家⁴である (Eilenberg 2005, Wadley and Eilenberg 2005)。

「違法」の語は、その語が何を指しているかが一つの問題である。特に国境地帯在住者の視点から見た場合、この一語のみでは複雑な様相をあまりにも簡単に説明付けてしまっていることにもなりかねない。「違法」の語には、間違っただけの行いやそういったことが行なわ

⁴ ある匿名の評論家によれば、これらの企業家は必ずしもマレーシア人のみではなく、台湾人、韓国人、フィリピン人、インドネシア人の場合もある。このことは同じような事業が行なわれているインドネシアの他の地域については当てはまる可能性がある (e. g. McCarthy 2000)。しかし、ここに言及された国境地帯の材木商の親分達はもっぱらサラワクの華人である (そしてその他の地域とは強いつながりを持っていない)。

れる可能性が示唆されており、それらは国家レベルの関心事に視点を置けば、実には的を得た表現である。が、「国境地域の居住者が、国境をはさんだ交易活動に経済的権利を誇らしげに賭けている有様を示して」いるわけでは必ずしもない (Flynn 1997:324)。遠い存在である政治家によって違法と定義されている行動に自らが関わっていることには気づきながら、国境地域の居住者らは、道徳的に間違っただけを行なっているとは考えてはおらず、法律の方が不正で理屈に合わないと思っている。つまり、国家の法律によって違法と定められていることは、多くの場合国家のエージェントにとって不正のないものなのであり（もちろん彼ら自身も法からの抜け道を見つけようとするものはあるだろうが）、国境地域居住者は国家の定めた決まりごとに対して、もっと臨機応変に日々あたっているとみえる。外部から、また自分たちの利害に反して押し付けられた法律のお蔭を被っているとは思っていない。⁵ このことは、1998年からの国境地域における伐木搬出作業にもっとも顕著に現れている。この作業は国家からは違法と、地域コミュニティからは合法と見なされており、今や森林は彼らの伝統的なコントロール下に戻っている。（この問題に対する我々の認識は、以下に記される彼らの活動を大目に見ているものではなく、またこれらの活動について記すことで、全てのイバン族がそういった活動に等しく参加していると示唆しているものではない。）

ケース1：自警団

2000年12月初めに、カプアス・フルの県都であるプトゥス・シバウの法廷は、散弾銃とブッシュナイフで武装し、血族の死に対する報復を誓った300-400人からなるグループによる殺人の現場となった。⁶ ウスナタという名のマレー人が被害者であったが、この人物は2000年1月にサンダクというイバン族の両替商を殺害したかどで裁判にかけられていた。法廷におけるこの殺人は、裁判所の建物の中で行なわれたインドネシア初の自警団による殺人として、国家レベルで新聞種となった。アブドゥラフマン・ワヒド大統領は被害者の家族に面会し、州の役人は加害者に裁きが下るよう誓った (Kompas 2000b; Pontianak Post 2000a, 2000b)。しかし、月日が過ぎ何年たっても、この事件は地元、国家当局の「レーダースクリーン外」にあり、何百人もの参加者のうち殺人のかどで告発された者は誰もなく、また今後も現れそうにない。

表面的には、このことはアムックマッサの一例に過ぎないようにも見える。アムックマッサとは、司法制度が働いていない、という背景の下に、多くの場合些細な犯罪を犯した者に対して、一見突発的に行なわれる殺人である (Colombjin 2002)。が、報道には現れてい

⁵ 近刊 *Illicit Flows and Criminal Things* (Schendel and Abraham, forthcoming)はこの複雑性について論じている。

⁶ 既に噂のあったこの殺人を防止するため位置にいた警察官は、数の点で引けをとり、退却した。警察と自警団との交渉は殺人の後で行なわれ、警察は被害者の首を切り落とさないようにとの説得を行なった。

ない何か、言い換えれば潜在的な構造と動機は、国境地域におけるアイデンティティー、国家権力の衰退、公務員の汚職の相互作用を白日の下にさらしている。⁷ イバン族の両替商であるサンダクは、婚姻によってウスナタと親戚関係にあった。ウスナタはサンダクの従姉妹と結婚していた。国境地域での取引で集めた7千万ルピアを詰めた袋を抱えたサンダクが、ウスナタと高速モーターボートに乗っていたことはごく自然なことであった。銀行に向かったの長い旅の途上でウスナタと運転手のパダン人のエディがサンダクを殺害し、船外に投げ捨てたのは明らかである。何ヶ月かするとサンダクの遺体は発見され、警察はウスナタに疑いをもち始めた。(エディは既に州外に逃げ出していた。) というのも、ウスナタはサンダクと最後まで行動をともしていた人物の一人であるだけでなく、サンダクの失踪後、高価な消費財を買うようになっていたからである。サンダクのイバン族の血族は、ウスナタに、イバン族の慣習法(アダット)に従ってパティニャクあるいは血の貨幣を支払うように要求した。彼が拒んだため、ことは県の法廷に持ち込まれることになった。裁判の初日が終了した後、関係するイバン族は、首席裁判官に賄賂を使ったウスナタは無罪になるであろうと判断した。そこで彼らは襲撃を計画し、サンダクにつながるのあるイバン族を国境の両側から集結した。報復の他に、彼らが自分たちの行動の根拠としたのは、政府から正義は期待できないのだ、という点であった。また彼らは、ウスナタがイバン族のアダットに従おうとしないことにも激怒した。もしパティニャクを払っていさえすれば、ウスナタはまだ生きていたであろうに。犯罪に対する司法制度の無力さと腐敗に対するごく一般的な捉え方から生じたとはいえ、自警団によるこの殺人行為は、ジャワなどにおける一般的なアムックマッサとは大いに異なっている。アムックマッサは、路上、市場などで窃盗などの些細な罪を犯した者に誰かが気づいた時に殆んど突然に発生する。アムックマッサは迅速に行なわれ、直ちに検証と告発が続く。これに対し、ウスナタの殺害は何日にもわたって計画、組織され、社会的、地理的に広範囲のネットワークから結集された一団が関わりっている。そして法の裁きの場において行なわれていることは、インドネシアの自警団殺人には見られない例である。直接的ではあるが非暴力的に警察との対決がなされている。

ケース2：ギャング団

2005年1月、26人の政府の役人⁸と一名のテレビジャーナリストからなるチームが、ベトゥン・カリフン国立公園周辺における違法伐木搬出について調査を行なった (Antara 2005; Kompas 2005a)。これに先立つこと6週間、警察は3人の華人系マレーシア人を、国境をまたがった伐木搬出のかどで逮捕し、機材と材木を没収した (Kompas 2004a)。「首謀者」で

⁷ 以下の記述は事件に関わりを持たないイバン族の同僚とのやり取りを根拠としている。

⁸ これらの役人はカブパテンつまり県の森林警備官、検事、警察官、軍関係者からなっており、そのうちの一部はかなりしっかりと武装していた。

あるアペンという名の、非常に悪名高い華人系マレーシア人の材木商のボスあるいはトゥケイ (Equator Online 2004a, 2004b) は逃亡していた。新しいチームはアペンを逮捕することを目標に掲げたが、結果的には彼らの乗ったキジャンは悪路を進むことができなかった。そこで押収品の一部であったトヨタのランドクルーザー (マレーシアの登録番号表付き) を徴用した。

チームが一晩のキャンプのため停車していた時、20 人ほどの武装集団を乗せたマレーシアナンバーのピックアップが2台接近しつつあった。リーダー格のイバン族の男がチームに尋問を始めたが、警察や軍部のメンバーに恐れを抱いていないことは明らかだった。チームの目的と、没収した乗り物を利用していることを知るが早いか男は怒り出し、地元の仕事が無くなるのではないかと責めた。そして手の者に乗り物を押収するようにと命じ、チームは乗り物を失って立ちつくした。が、事態は奇妙な変転をみせ、チームはランジャクにある準県の警察本部に自分たちを送り届けてくれるよう交渉し、その希望は受け入れられた。ランジャクに到着すると、一団は乗り物を返還することを拒否し、体勢を立て直した警察の手を逃れ国境を越えて逃げ去った。

チームに参加していたジャーナリストは、警察と軍に介入の意欲も能力もまったくないことに驚きを隠せなかった。彼の報告によれば、チームのうち防衛部隊のメンバーは、介入を行なわない、ということでイバン族のリーダーと合意したが、多分地元のコミュニティーとの更なる紛争を恐れたからだろう、とのことである。県の官吏が後になって彼に語ったのは、これは地元での事件であり、部外者が関わるべきでもなければ公にすることでもない、ということであった。カリ・カリバール (反違法伐木搬出合弁企業) の州のコーディネーターは、地元民は自国政府などよりも外国人 (アペン) に対してのほうがずっと忠実で協力的になり得るということも知らないのか、と述べた。彼によれば、県警察の手に負えないとなって初めて事件を州警察に引き継ぐのだそうである。

カリ・カリバールのコーディネーターはおそらく何らかの「内部情報」を手にしていただろう。というのもそれから2ヶ月以内には、県警と国家警察はオペラシ・フータン・レスタリ (Operation Everlasting Forest 永続森林作戦) に着手し、国境を超えた違法伐木搬出に関わっていた何人かのマレーシア人とインドネシア人 (華人、イバン族、マレー人) を逮捕した。この作戦下にあっては既に切り出された材木を搬出することも禁止され、こういった取引に収入源を得ていた地元民に動揺を引き起こした。彼らは多数からなる代表团 (約 200 名ほど) を県都のプトゥス・シバウに送り出し、禁令の撤廃を要求した。材木はコミュニティーの森 (フータンアダット) から採れたものであり、インドネシアの市場は桁外れに遠くにある、と彼らは主張した。今日に至るまで、なんらの結論は出されておらず、人と物の国境を越えた行き来に沸いた国境の町はゴーストタウンとなっている。イ

インドネシアの森林相 M. S. カバンは、「地元コミュニティーは商業的な製材を許可するなんらの法律的根拠を持っていない。」と述べた (Kompas 2005b, 2005c; Media Indonesia 2005; Pontianak Post 2005a)。この言葉によって、おそらく国境地域の歴史における伐木搬出の局面に終止符が打たれた。

より広い視野から見た自警団とギャング団

以上の二つの例は、これらの地域が現在直面している資源問題、社会問題を語る上で理解されるべき国境地域における生活の変化をそれぞれの形で示している。

カリマンタンのイバン族は、民事、刑事にわたる事件をかなりの程度自治的に取り扱ことに慣れているため、自治を減じようとする試みに立ち向かうことにためらいはない。19世紀末にオランダ官僚は彼らをして *een levendig en strijdlustig volk* (活動的、好戦的人々)⁹ と評している。このような発言の意図する類型化には注意を払う必要があるが、過去一世紀半にわたって国境の両側にまたがって居住していたイバン族が持つ文化的なバイタリティーと大胆さがある意味で雄弁に語っている言葉であるとも言えよう。それらの特質は、イバン族が国家との間に作り上げてきた独自の関係によって育まれたのである。イバン族の居住する蘭領西ボルネオと英領サラワク間の境目一帯は、19世紀、18世紀初頭を通じ、植民地宗主国にとって最も連続的に国境地域の緊張関係を産み出してきたが、これは偶然のことではない¹⁰。というもの、イバン族を好きに封じ込めたり、鎮圧することはかなりの困難だったからである (Wadley 2001, 2004)。

公式な講和(1886年)の後ですらも、植民地政府は、イバン族を敵に回さぬようその扱いに十分注意した。例を挙げれば、国境の両側において、イバン族は他の現地人に比べ低く課税されていた。何故なら、サラワクにおいては、彼らは西ボルネオにおける植民地政府の遠征に参加することを義務付けられており、また、蘭領西ボルネオにおいては、サラワクにおけるそういった慣行に習った措置が取られたのだろう。¹¹ その上、オランダのシステム下においては、トレメンゴンやパティといった指名制のリーダーは、次第に自治性を強めていき、特に1940-50年代の政治的大混乱、大変動の時期においてはその傾向性が特に顕著であった。その上、カリマンタンのイバン族はサラワクと特に相性がよいのだが、このことはサラワク政府によっても助長された。1882年、2代目の英国人サラワク統治者で

⁹ トロンプ知事から蘭領インドネシア総督への書簡。10 June 1891, Openbaar Verbaal 12 June 1894 No. 13, ARA。

¹⁰ トロンプ知事から蘭領インドネシア総督への書簡。4 April 1894, Openbaar Verbaal 6 June 1895 No. 12, ARA。

¹¹ 表向き理由はイバン族の「収入能力」が低いことが原因とされていた。が、上カプアス県の他のダヤク族達もまた貧しく、よい市場から遠く離れていたことを考えると、このことは理由としては不適當である。(Letter to NI Governor-General from Resident Tromp, 4 April 1894, Openbaar Verbaal 6 June 1895 No. 12, ARA)。

あるチャールズ・ブルックは、カリマンタンのイバン族を捕らえて自らの統治下に置こうと提案したが成功しなかった。「これらのダヤク族たちが住み着いている国境地帯に隣接する土地の一部までが、サラワクの統治下へと変更がなされた。」¹² — このことはイバン族の歴史物語の中の記憶にとどめられている。というわけで、カリマンタンのイバン族が特別な場合において自らの利権を強く主張することは、危険なことであるかもしれないが、何も驚くべきことではない。1960—70年代に、国境地域における対破壊活動を目的とした軍備が増強された期間において、イバン族は散弾銃を手渡せというインドネシア軍の命令に従うことを拒否した。数百人の屈強な集団が儀礼用の衣服を纏い、トレメンゴンとパティフに伴われて陸軍司令部を訪れると、野豚やサルが荒らしまわる畑を守る兵士をもし陸軍が配置してくれるなら散弾銃を手渡す、と述べた。今日に至るまで、イバン族に統御されている三箇所の準県のみが、県下において、市民が自宅に土地の警察署への登録なしで散弾銃を所有してよい地区となっている。

こういった背景と、また、1998年のスハルト政権崩壊後に起こった政府の非中央集権化、警察、軍部の混乱という現実の下に置いてみれば、ウスナタが復讐目的で殺害されたことはより理解しやすいものになり、そこに様々な歴史的な連続性も感じることができる。文化的に強く意識されている自治は、慣習法は地元においては国法に先立ち、イバン族の力づくの追撃は完全に合法的なものであるという確信の中にとりわけ明らかである。イバン族の結集能力は今も残っており、19世紀に何百、何千と行なわれた首狩りの遠征に歴史的な類似が見出せる (Freeman 1960)。インドネシアの政治に起こった諸変化は、1988年以降イバン族の行動範囲を広げているが、ウスナタの事件に関わったイバン族は、歴史的に育まれてきた特性の恩恵にあずかることなしに働くことはできず、またそうしたいとも望んでいない。

ギャング行為の例に関しては、さらに二つの要素の影響力が働いている。まず第一に以下の点が指摘できる。国家全体において非中央集権化が進んでいるため、インドネシア全土にわたる地方政府は、現在ではかつてないほどの権力を手にしており、カプアス・フル県の官僚は、国境にまたがった伐木搬出を、中央政府から長く放置されてきた国境地域の経済を発展させるよい機会とみなしている。その上、中央、また県レベルの政府からの財政援助が劇的に減少した場合、県の官僚は自らの地位を守る準備をする必要に迫られるだろう。第二に、地元のイバン族の多く（県の官僚のうちのある者もまた同じだが）は、現在行なわれている伐木搬出の適法性に対する中央または県レベルの政府と見解を異にしており、「よそ者」の干渉、例えば上記したような政府の作戦行動は地方自治に対する違反であるととらえていることがあげられる。県警察、また地元の軍組織の消極性は、伐木搬出の

¹²チャールズ・ブルックより蘭領インドネシア総督への書簡, 25 September 1882, Mailrapport 1882 No. 1066, ARA.

利益に対して彼らが十分注意して反応しており、イバン族の行動力にごく健全に敬意を払っていることの証とも捉えられる。¹³

1998年に「新秩序」政府が崩壊すると、華人系マレーシア人の材木を扱う企業家らは、伐木搬出の運営のため、長くて穴だらけの国境を横断するようになった。彼らは所得上の必要性のため、地元のコミュニティーと日常的に協力関係を保ち、県政府からは暗黙の上で認められた存在となっている。経済的、政治的に伝導性のある風潮と熱帯産の材木に対する世界的な需要に加え、道路網の改善（本来的には国家の治安上の理由から行なわれたのだが）によって国境越えが容易になると、そのような運営はより手軽に行なえるものとなった。地元コミュニティに関する限り、国境域の森は伝統的に自分たちの管理する森であると考えており、そこから採れる木材は、地元において得られた商議の産物と彼らはみなしている。¹⁴ 事業を円滑に進めるため、材木商らは警察、軍部、国境地点の出入国管理局の職員などを含む、県、準県レベルの有力な官僚に賄賂を贈っているが、このことは国境域の地元民には広く知れ渡っている。

カプアス・フル県のバタン・ルパル準県においては、（地元ではトゥケイとして知られる）マレーシア人の企業家と地元のイバン族を巻き込んだこういった一連の動きは、周囲に広く影響を及ぼしている。文化的、経済的に長くサラワクと結び付き、中央、地方政府の双方から置き去りにされ続けてきた結果として、国境地域に在住するイバン族の多くは国家に対する参加意識が低い。マレーシア人のトゥケイ¹⁵（およびその雇い人であるマレーシア国籍のイバン族）はインドネシア政府の役人よりもイバン族の習慣や言語に通じており、イバン族はそういった自分たちに近い存在に与することに対して何のジレンマも感じていない。地元のイバン族らは、トゥケイおよび国境を挟んだきょうだい分と付き合いことに居心地のよさを感じている。また、カリマンタンのイバン族は賃金労働のために国境を越えることを長く行なってきたが、サラワクに住む仲間達はカリマンタンに同じように引き付けられてきたわけではない。伐木搬出をめぐる諸活動は分割されたイバン族が新たなつながりを育む機会をもたらし、国境を越えた民族関係の長い伝統をさらに強めた。国境にまたがった伐木搬出が本格的に開始された後、県や国家レベルの報道機関はそのことを遠いカプアス・フルでおこっている出来事として時折取り上げるだけであった。（e. g.

¹³ 地元の文民、警察官、軍関係の役人は概して「地元民」ではなく、州の内外、遠くはジャワやバリに至るまで、様々な地方から赴任してきている。これらの役人達が、国境域の自らの属する国家側において、密輸について違法活動の助長と手数料の取得以上の関わりを持っているのか、もし持っているのならどのようになのか、という点に関しては、越境的な活動による人々の結合とその違法性を考慮に入れた場合、推測が困難である。

¹⁴ 樹木の伐採とマレーシア材木商の親方との協力に関し、コミュニティ内の意見は分裂しているが、殆んどのコミュニティーは運営方法に満足している。ただし、最近になって伐木の結果もたらされた水質汚染などを原因に緊張関係が生じる場合もある（Suara Pembaruan 2004c）。

¹⁵ 西カリマンタンで作業を開始する以前に、マレーシア人のトゥケイらは何十年かにわたってサラワクのイバン族居住地において作業を行っており、誠実さと職業倫理を買って地元のイバン族を優先的に雇用している。

Jakarta Post 2000, 2002, 2003; Pontianak Post 2003a, 2003b) が、後になって国境域での密輸の量が増加し、資源と国家の歳入に対する損失が無視すべからざる程度に至ると、メディアの注目が再びこの遠く離れた国境地域に集まった。¹⁶ この話題はマレーシアによる西ボルネオの資源搾取として取り上げられ、「マレーシアは我々の果物を食い、インドネシアは樹液を飲み下す」(Suara Pembaruan 2003)、「カルバルの国境域におけるマレーシアによる『植民地化』はいつ終焉するのか？」(Suara Pembaruan 2004b) などといった挑発的な見出しが躍った。報道の語調が国家主義的な色彩を帯び、越境活動は明らかな犯罪とみなされるようになった。トゥケイとマレーシア人の労働者は銃で武装し、地元のコミュニティーを脅しつけるギャングとして扱われ、「マレーシアの華人ギャング」という呼び名をしばしば耳にすることとなった (Suara Pembaruan 2004a; Sinar Harapan 2004a, 2004c; Media Indonesia 2004)。政治的態度がこのように変化したため、国家、および州レベルの政治家は、県の官僚に迅速に措置をとるよう要求した。県政府はこれらの「マレーシア人ギャング」に対する処置を請け負うと断言したが、当初、違法な伐木搬出に対する取り締まりは殆んど行なわれず、不熱心な取り組みの結果逮捕されるのは「雑魚」ばかりであった。(Kompas 2003a, 2003b; Pontianak Post 2004) とりわけ、県の官僚たちは、国境を越えたつながりがよい収入源となっているため、あせって違法行為を止めようとすることはなかった。「ギャング」の活動は止むようには見えず、県の官僚と地元コミュニティに支援を受けているようであった (Kompas 2004b, 2004c, 2004d; Sinar Harapan 2004b)。しかし、オペラシ・フータン・レスタリは明らかに状況を一変させてしまったようだ。現在では、国家と州が、県から収入の流れの管轄権を取り上げようとしている姿を目にすることができる。この地域をよりよい管理下に置けるように国境の再軍備とアブラヤシプランテーションの建設を行なう、という話し合いがなされている (Jakarta Post 2005; Pontianak Post 2005b)。この伐木搬出から (程度は限られていたにせよ) 何がしかの収入を得ていた国境周辺のコミュニティーが今後どうなるか、という問題は未解決の状態にある。

結論

インドネシア国家の辺縁に位置し、文化的、経済的に隣国と近い関係を続けてきたため、西カリマンタンのイバン族は、国家の中心地、住民と自分たちは、経済的、文化的、歴史的に異なっているのだ、という感覚を持っている。その上、国境地域に在住するイバン族の生活は、一般的に言って、いくつかの方向から吸引力が働いている感覚を伴っている。どの力により強く引き寄せられるかということは、引く側、引かれる側の相互関係の程度

¹⁶ ここ数年にわたって発生した、国境における法からのいくつかの逸脱行為は、メディアや外交筋にとって国境域での事件を「熱い」ものにする役割を果たした (Kompas 2000a; Suara Pembaruan 2000)。

に左右される (Martinez 1994:b:12)。実際のところ、自分の属する国民国家に対する忠誠心が弱い国境地域住民ほど、国境を挟んで形成された強い絆を持っているものである (Martinez 1994a:19)。政治的には、イバン族は確固とした愛国心を求める国民国家に属している。しかし民族的、感情的、経済的な意味においては、国家という存在ではなく、その大部分が他の国民国家に所属する何か他のものの一部であるという感覚を、彼らはたいていの場合持っているのである (Baud and Schendel 1997:233)。多くのイバン族にとって、国境をまたいで形成された諸関係は自分たちの属する国家に対する以上に強い力を持っており、国家に属している、という意識やアイデンティティーは希薄である。

多くの場合、国境地域の住民は、当然国家法に触れながら国境を越えた経済的つながりを網目のように形成している。彼らの属する国家は国家規模の経済の中に国境地域を統合できていないため、多くの場合において、国境周辺の住民らは他に選択肢を持っていないのである (e. g., Baud and Schendel 1997:229)。ある法が自らの利益と生活スタイルに干渉してくるものとみなした場合、彼らにはその法を都合のよいように解釈したり、無視したり、また違反を行なったりする傾向が見られる。国家間の境界域を越えた相互関連を制限するような厳格な法が施行されれば、紛争や、法の好き勝手な解釈があちらこちらで見られることになるのではなかろうか (Martinez 1994:b:12)。また、国境地域の住民が、体験的に自己の属する国家に距離感を感じるケースが増加している。というのも、彼らと国家の間には利益の相違とそれをめぐる争いが存在するからである。国家という巨大な統一体の中で、自分たちは辺縁的な存在であるととらえているイバン族の多くは、はるかかなたにある政治的中心地は国境地域の特殊状況を決して理解してくれていない、と感じている。

国境地域の環境には特殊な性質があるが、このことは、国家に帰属しているようでもあり、分離しているようでもあるという曖昧さから発生している。国境は、それぞれ別の行政、取り締まり体制を持つ二つの国家を隔てているため、ある種の活動を行なうための「好機を生み出す構造」をもたらしているとも言える (Anderson and O' Dowd 1999:597)。密輸や違法交易はしばしば「国境地帯におけるとびきりすばらしい職」と呼び習わされる (Wendl and Rösler 1999:13)。例えば、ドナンとウィルソン (1999) は、国境がいかにも同時に「活用され」(交易)、「悪用され」(密輸) 得るかについて注目している。また、国境は経済的機會をもたらし、ものと人の双方向の流れを形作る。その中においては、もちろん、西カリマンタンの材木密輸の例で見たように、違法な輸出入からの経済的利益獲得の容易化も含まれる。このように、国境地域における破壊的要素をもった違法な経済活動は (1999:87)、多くの国境地域住民の生計にとって非常に重要なものであり、場合によってはその経済的影響力は、同地域にとってもっとも強い。

が、しかしこのような典型的な「国境」の筋書きは、イバン族の住む国境域に関してはごく一面を伝えているに過ぎない。西カリマンタンのイバン族がサラワクとの間に形成してきた特別なつながりについて言及することなしに、イバン続にとっての国境を十分に理解することはできないのである。イバン族は州内における少数民族であり、国境によって隔てられ、はっきりとその豊かさが目に見える隣の国家の方により多くの同一民族が在住している。が、それだけではなく、彼らは国境兩岸の植民地、また国家政府から継続的に特別な扱いを受けてきたことも注目される。そういった特別な空間内である国境域において、彼らは自治についての確固たる意識と、中央からの分離意識を形成していった。この非常に重要な歴史的経緯を考慮に入れてみれば、1977年のアジア通貨危機と1998年のスハルト政権の崩壊以降の状況下において起こりつつある諸事件も、無理なく理解できるのではなかろうか。

参考文献

- American Heritage Dictionary. 2000. *The American Heritage Dictionary of the English Language*, 4th ed. Boston: Houghton Mifflin.
- Anderson, James, and Liam O’ Dowd. 1999. “Borders, Border Regions and Territoriality: Contradictory Meanings, Changing Significance.” *Regional Studies* 33: 593-604.
- Antara. 2005. Kail Sesali Sembieran Perampasan Mobil Bukti “Illegal Logging.” *Antara New Agency*, 15 January.
- Baud, Michiel, and Willem van Schendel. 1997. “Toward a Comparative History of Borderlands.” *Journal of World History* 8: 211-242 .
- Colombijn, Freek. 2002. “Maling, Maling! The Lynching of Petty Criminals.” In *Roots of Violence in Indonesia*, ed. Freek Colombijn and J. Thomas Lindblad, pp. 299-329. Leiden: KITLV Press.
- Donnan, Hastings, and Thomas M. Wilson. 1999. *Borders: Frontiers of Identity, Nation and State*. Oxford: Berg.
- Eilenberg, Michael. 2005. “Borderland Strategies - Fluid Borders and Flexible

- Identities: A Case of the Iban in West Kalimantan, Indonesia.” Master’ s thesis, Department of Anthropology and Ethnography, University of Aarhus, Denmark.
- Equator Online. 2004a. “Tangkap Apeng, Kenapa Baru Sekarang.” *Equator Online*, 9 August.
- Equator Online. 2004b. “Tangkap Apeng: Masyarakat Masih Tunggu Janji Kapolda.” *Equator Online*, 14 September.
- Fariastuti. 2002. “Mobility of People and Goods across the Border of West Kalimantan and Sarawak.” *Antropologi Indonesia* 67: 94-104.
- Flynn, Donna. 1997. “ ‘We are the border’ ” : Identity, Exchange, and the State along the Benin-Nigeria Border.” *American Ethnologist* 24: 311-330.
- Freeman, J. D. 1960. “On the Concept of the Kindred.” *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 91: 192-220.
- Jakarta Post. 2000. “Illegal Logging Rampant along Indonesian-Malaysian Border.” *Jakarta Post Online*, 23 May.
- Jakarta Post. 2002. “Loggers Head for Heart of Betung Kerihun National Park.” *Jakarta Post*, 26 November.
- Jakarta Post. 2003. “West Kalimantan Unable to Halt Illegal Logging.” *Jakarta Post Online*, 18 March.
- Jakarta Post. 2005. “Military Wants Battalions in Border Areas.” *Jakarta Post Online*, 8 August.
- Kompas. 2000a. “Malaysia Belum Tanggapi Soal Pencurian Kayu.” *Kompas Cyber Media Online*, 4 July.
- Kompas. 2000b. “Terdakwa Tewas Dihakimi Massa.” *Kompas Cyber Media*, 14 December.
- Kompas. 2003a. “Operasi Wanalaga II Tahan 116 Pelaku Penebangan Liar.” *Kompas Cyber*

- Media*, June 17.
- Kompas. 2003b. "Cukong Kayu Illegal Asal Malaysia Belum Tertangkap." *Kompas Cyber Media*, 23 July.
- Kompas. 2004a. "Empat Warga Malaysia Ditangkap Terlihat Pencurian Kayu Diperbatasan." *Kompas Cyber Media*, 11 March.
- Kompas. 2004b. "Pengiriman Kayu Illegal ke Malaysia Masih Terjadi." *Kompas Cyber Media*, 28 July.
- Kompas. 2004c. "Dukung Kapolda Tuntaskan Illegal Logging." *Kompas Cyber Media*, 11 August.
- Kompas. 2004d. "Hutan Makin Rusak, Industri Kayu Makin Sulit." *Kompas Cyber Media*, 25 September.
- Kompas. 2005a. "Wartawan TV5 dan Tim olah TKP Digelandang Massa di Pontianak." *Kompas Cyber Media*, 15 January.
- Kompas. 2005b. "Warga Protes Operasi Hutan Lestari." *Kompas Cyber Media*, 23 March.
- Kompas. 2005c. "Menhut: Masyarakat Adapt Dilarang Terbitkan Izin Penebangan Hutan." *Kompas Cyber Media*, 29 March.
- Martinez, Oscar J. 1994a. *Border People: Life and Society in the U.S.-Mexico Borderlands*. Tucson: University of Arizona Press.
- Martinez, Oscar J. 1994b. "The Dynamics of Border Interaction: New Approaches to Border Analysis." In *Global Boundaries, World Boundaries: Volume 1.*, ed. Clive H. Schofield, pp 1-15. London: Routledge.
- McCarthy, John F. 2000. "Wild Logging" : *The Rise and Fall of Logging Networks and Biodiversity Conservation Projects on Sumatra's Rainforest Frontier*. Occasional Paper No. 31. Bogor: Center for International Forestry Research.

- McCoy, Alfred W. 1999. "Requiem for a Drug Lord: State and Commodity in the Career of Khun Sa." In *States and Illegal Practices*, ed. Josiah Heyman, pp. 129-167. Oxford: Berg.
- Media Indonesia. 2004. "Belum Ada Fakta Gangster Malaysia Kuasai Perbatasan." *Media Indonesia Online*, 25 April.
- Media Indonesia. 2005. "Masyarakat Kapuas Minta Polisi Tidak Segal Kayu Hutan Adat." *Media Indonesia Online*, 29 March.
- Paredes, Americo. 1958. *With a Pistol in His Hand: A Border Ballad and Its Hero*. Austin: University of Texas Press.
- Pontianak Post. 2000a. "400 Massa Bersenjata serang PN Kapuas Hulu." *Pontianak Post Online*, 14 December.
- Pontianak Post. 2000b. "Keluarga Usnata Lapor ke Presiden." *Pontianak Post Online*, 19 December.
- Pontianak Post. 2003a. "Mafia Illegal Logging, Cukong atau Aparat." *Pontianak Post Online*, 22 June.
- Pontianak Post. 2003b. "Sepekan, Ratusan Truk Kayu Keluar Masuk Badau." *Pontianak Post Online*, 16 September.
- Pontianak Post. 2004. "Tim Wanalaga Sita Kayu Illegal di Perbatasan." *Pontianak Post Online*, 16 March.
- Pontianak Post. 2005a. "Masyarakat Perbatasan Minta Solusi Illegal Logging." *Pontianak Post Online*, 4 April.
- Pontianak Post. 2005b. "Buka Lahan Sawit Sepanjang Perbatasan: Strategi Baru Amankan Batas Malaysia-Kalimantan." *Pontianak Post Online*, 10 May.
- Riwanto Tirtosudarmo. 2002. "West Kalimantan as 'Border Area' : A

- Political-Demography Perspective.” *Antropologi Indonesia* Special Issue: 1-14.
- Schendel, Willem van, and Itty Abraham. Forthcoming. *Illicit Flows and Criminal Things: States, Borders, and the Other Side of Globalization*. Bloomington: Indiana University Press.
- Siburian, Robert. 2002. “Entikong: Daerah tanpa Krisis Ekonomi di Perbatasan Kalimantan Barat-Sarawak.” *Antropologi Indonesia* 67: 87-93.
- Sinar Harapan. 2004a. “ ‘Gangster’ Bersenjata Malaysia Dilarporkan Kuasai Perbatasan.” *Sinar Harapan*, 22 April.
- Sinar Harapan. 2004b. “Pembalakan Liar di Perbatasan Indonesia-Malaysia (3-Habis) Hukum Lemah, Hutan pun Hilang.” *Sinar Harapan*, 7 May.
- Sinar Harapan. 2004c. “Cukong Kayu Malaysia Masuk Daftar Buronan.” *Sinar Harapan*, 29 October.
- Suara Pembaruan. 2000. “Sengketa Perbatasan yang Berawal dari Berebut Hasil Hutan.” *Suara Pembaruan*, 11 September.
- Suara Pembaruan. 2003. “Lika-liku Praktik Illegal Logging di Kalbar: Malaysia Makan Buahnya, Indonesia Telan Getahnya.” *Suara Pembaruan*, 8 August.
- Suara Pembaruan. 2004a. “Mafia Malaysia Babat Hutan di Perbatasan Kalbar.” *Suara Pembaruan*, 22 April.
- Suara Pembaruan. 2004b. “Kapan ‘Penjajahan’ Malaysia di Perbatasan Kalbar Berakhir?” *Suara Pembaruan*, 9 May.
- Suara Pembaruan. 2004c. “Warga Perbatasan Diteror Cukong Kayu.” *Suara Pembaruan*, 22 December.
- Tagliacozzo, Eric. 2001. “Border Permeability and the State in Southeast Asia: Contraband and Regional Security.” *Contemporary Southeast Asia* 23: 254-274.

- Wadley, Reed L. 1998. "The Road to Change in the Kapuas Hulu Borderlands: Jalan Lintas Utara." *Borneo Research Bulletin* 29: 71-94.
- Wadley, Reed L. 2001. "Trouble on the Frontier: Dutch-Brooke Relations and Iban Rebellion in the West Borneo Borderlands (1841-1886)." *Modern Asian Studies* 35: 623-644.
- Wadley, Reed L. 2004. Punitive Expeditions and Divine Revenge: Oral and Colonial Histories of Rebellion and Pacification in Western Borneo, 1886-1902." *Ethnohistory* 51: 609-636.
- Wadley, Reed L., and Michael Eilenberg. 2005. "Autonomy, Identity and "Illegal" Logging in the Borderland of West Kalimantan, Indonesia." *The Asia Pacific Journal of Anthropology* 6: 19-34.
- Wendl, Tobias, and Michael Rösler. 1999. "Introduction—Frontiers and Borderlands: The Rise and Relevance of an Anthropological Research Genre." In *Frontiers and Borderlands: Anthropological Perspectives*, ed. Michael Rösler and Tobias Wendl, pp. 1-27. Frankfurt am Main: Peter Lang.